

大学生の無気力感に 友人からのソーシャルサポートがもたらす影響

— 自己効力感を媒介として —

花 澤 孝 一

無気力感とは、『何をする気力もないこと。やる気のないこと。また、そのさま。』と辞書において説明される。日本において無気力感とは学業領域固有の無気力感ともいうことが可能である。スチューデントアパシーとして、男子大学生をはじめとする教育分野において広く扱われてきた。この大学生の無気力感を低減させる要因として、身近な友人からのソーシャルサポートが挙げられている。本研究では、個人の要因として自己効力感がソーシャルサポートと無気力感を介在していると考えられる。また同時に、近年の若者においてはインターネット上の友人もまたソーシャルサポートの送り手となり得る可能性が考えられることから、インターネット上の友人からのサポートが無気力感に与える影響についても検討を行った。

近畿圏内の私立大学生189名を対象にWeb調査を行った。有効回答者数169名で、平均年齢は19.93歳 ($SD=1.25$) であった。女子学生129名は平均年齢19.89歳 ($SD=1.04$) であった。男子学生40名は平均年齢20.08歳 ($SD=1.97$) であった。

共分散構造分析を行った結果、ソーシャルサポートの「現実友人サポート」が自己効力感の「前向きさ」を介し、無気力感へと影響を及ぼしていることが示唆された。また、自己効力感においては特に「前向きさ」が、自己効力感においての他の指標を高める影響を与えていることも示唆された。また「現実友人サポート」は、無気力感に対して自己効力感を介して効果を及ぼす場合と、直接的に効果をもたらす場合とがあることが示された。

しかしながら今回併せて検討した「インターネット友人サポート」は、自己効力感及び無気力感に対して影響を与えていないことが示唆された。このことに関しては、本研究で測定されたソーシャルサポートは、知覚されたサポートであったことが要因の一つとして考えられる。この知覚されたサポートとは、いざという時にどれくらい周りの人が助けてくれるかというソーシャルサポート利用可能性の知覚あるいは将来の予期を示すソーシャルサポートの一側面である。つまり本研究で対象としたインターネット上のみ交流のある友人という存在に対しては、いざという時に助けを求めがたく、また調査対象となった大学生にとっても助けを求めたという経験が少ない、あるいは無かったという可能性が考えられる。また、「友人」という言葉がインターネット上でのみ交流のある人物との関係性を表現するのに適していなかった可能性も考えられる。いずれにせよ、大学生における「インターネット友人」を送り手としたサポートは、知覚しがたく、いざという時に助けを求める対象となりたいたことが示唆されたと言えるだろう。

今後の展望として、インターネット上の友人から受けられるサポートについて、より焦点を当てた研究を行っていくことが望ましい。